

京都大学生存圏研究所創立10周年記念講演会

近代西洋文明の限界

ーパラダイム転換のときー

June 6, 2014

佐藤 哲也

京都大学宇治キャンパス 宇治おうばくプラザ

本日のテーマは

“400年間発展し続けてきた
近代西洋文明は、今後どう
展開するだろうか？”

私の答えは

“近い将来崩壊する”

人類生存の必要条件

1. エネルギー（太陽光）
2. 居住環境
3. 食糧

人類生存の十分条件

“一人一人が生き甲斐、喜び
をもって暮らせる社会”



西洋文明のパラダイム

“合理主義”

合理主義は **西洋科学** を生み出し、自然の営みを支配するあらゆる法則を見いだし、人間生活を **合理的** にする様々な技術とエネルギーを生み出した。その結果、地球上の **人口** は限界を超えて増え続けている。これを可能にしたのは **競争原理** である。他方で、この競争原理は **効率化・スピード化・高度化** を究極にまで高め、社会を一方向的に細分化・先鋭化・**複雑化** させ、地球を覆い尽くす情報網はもはや全ての事柄の因果関係を不明にし、**修復不可能な巨大な一つの塊** と化し、**勝ち組と負け組** に二極化した不安定な社会を生み出した。

西洋文明のパラダイムの忘れ物(1)

“大局観 – ヒトはどうあるべきか”

西洋文明は、人間を万物の最上位に置き、人間の利便性のために自然や環境を自由に支配することを許す。“勝ち残る能力のある”**個人**の近視眼的な権利のみが優先され、**全人類**的視点、たとえば、全ての人間が快適と感じる社会という視点がない。その結果、環境は一方的に汚染され、人類の生存を維持する地球大気循環を修復不可能なまでに狂わせた。さすがに、その重大さは議論されるが、経済成長という競争原理の下ではかき消される。

西洋文明のパラダイムの忘れ物(2)

“フィードバックループ”

西洋文明は、競争による淘汰という文明を発展させる見事な合理的な方法論(戦術)はもつが、合理性に馴染まない“心”を持つヒトの集合としての人類の大局的な目標(戦略)を持っていない。従って、大局観に立って今置かれている位置を認識し、ズレがあればそれをフィードバックをかけて修正することができない。即ち、立ち止まることも方向転換することもできず、ただ戦術を駆使して成長を指向し続ける社会である。従って、適正な人口の保持や大気汚染の防止などを最優先課題にできない。

西洋文明のパラダイムの忘れ物(3)

“地球の有限性”

着地点(大局観)をもたず、競争原理にしたがって発展・成長するのみの西洋文明は、地球は無限の許容力をもつという前提に立っている。地球が有限であることを忘れている。

地球の有限性のみならず、**人口の有限性、人間の欲望(煩惱)**の有限性をも忘れ去られている。

日本のバブル崩壊(1992)は欲望の有限性の結果であり、リーマンショック(2008)はこれら全て、特に地球の有限性による成長の限界への警告である。

西洋文明パラダイムの限界(1)

リーマンショック(2008. 9. 15)の発生は天が与えた西洋文明の限界を本質的に示す最大の警告

リーマンショックは西洋パラダイムの忘れ物

- ・大局観の欠如
- ・フィードバックループの欠如
- ・地球(人間の欲望)の有限性

が引き起こした必然の結果である

“器は空っぽであれば、いくらでもモノを入れることができるが、満杯になれば、もはや入れることができない”

西洋文明パラダイムの限界(2)

先進国はリーマンショックから栄光ある西洋文明を取り戻そうと、この5年間もがき続けてきた。しかし、ギリシャやスペインなどの経済的基盤の弱い南欧の国々は国家財政破綻の淵にまで追いやられた。

最近、米国や日本も資本主義の禁じ手である中央銀行によるお札の節度無き生産を開始した。確かにアフリカ等にはまだ西洋文明は浸透していない。従って、ある程度のカンフル剤としての効果は現れるであろう。しかし、瞬く間に有限な地球を覆い尽くすこと間違いない。しかし、人口だけは、お構いなく際限なく増え続けるであろう。

その先は、競争原理の最も愚劣な世界戦争しか解はないのであろうか？

新たなパラダイムの条件

○大局観をもつ

全ての人が生きて甲斐を感じる社会の実現
地球の有限性の視点に立ち、自然環境と共生

○フィードバックループを備える

常に大局観に照らし現在の社会システムに修正を
かける仕組みを備える

○合理性・競争原理、即ち、成長を第一義としない

和を尊び、足を知るパラダイム

人間性・感性を尊重し、融通性も取り入れるパラダイム

パラダイム転換への期待(1)

歴史に学ぶ:

人類文明の歴史の中で人口が異常に増大した二つの時代がある

一つ目は、5~6千年前の古代文明のはじまりの時

人類は河川の定期的な氾濫のあと上流からの肥沃な土壌の供給により、穀類が成長するという**未曾有の智慧**を獲得し、農耕による食糧生産が増大し、かつ、安定した。その結果、人口が急激に増加すると共に人間の煩惱も増大

二つ目は、西洋文明の発展の時

自然法則の発見とそれを人間生活に応用する技術という**革命的な智慧**を獲得した結果、格段に生活が豊かになり、人口が爆発的に増加すると共に煩惱、特に、お金への異常な執着が増加

パラダイム転換への期待(2)

歴史から学ぶ:

古代文明の未曾有の発展の後には、比較的安定した人口推移で長期間継続した時代が続く

封建社会である

人間生活を豊かにする革新的な技術(智慧)の向上はなく、領民の煩悩を特に増大させる領主の搾取も無い社会:人口の爆発もなく、安定して長期間存続

日本における江戸時代がまさにこの社会に当たる

では、どうすればパラダイム
転換は実現できるか？

パラダイム転換への道

その1:ダーウイン的自然淘汰に委ねる

- ・先進国、特に、日本の人口減少傾向
- ・日本における若者達の帰農傾向

その2:先進国の指導者に期待する

- ・西洋文明の恩恵に最も浴している指導者に期待することはほとんど不可能に近い
- ・たとえ現れたとしても、極端に巨大化した西洋システムの塊の慣性力によって潰される

パラダイム転換への道

その3: 確かな方法論に基づくボトムアップ方式 による新しいシステムの地道な開拓

大学あるいは大学院教育の一環として、西洋パラダイムとは何か、その限界を徹底的に教え、学生達が中心となって、現代社会の中で弊害の現れている社会システムを身近な所から一つ一つ新しいシステムに作り替えていく。具体的には、そのシステムの関係者達と一緒に話し合いながら進めていく。関係者の協力を得るためには、関係者がそのシステムに求めているもの、たとえば、生き甲斐、働きがい、住みがいなどを目標として、様々な切り口からシステムの有り方をモデル化し、条件を変えながら、シミュレーションを行い、関係者の意見を取り入れたシステムを提言し、具体的にそれを築きあげる。

ボトムアップ方式によるアプローチ

挑戦システムの選択

現有関連システムの吟味

挑戦システムの目指す理念

理念を満たす機能の吟味

システム構築のシナリオ

シミュレーションによる評価

具体的新システムの提案と実行



Socio-Simulationics の例 1

本多健一（修士論文）
大和ハウス工業

“奈良郡山市の伝統的な
街並みの保存の提案”

住み家を4つのカテゴリーに分類(A,B,C,D)



A : 昔ながらの外観
(町家、古民家、伝統工法)



B : 在来木造工法
(昭和戦後からの一般木造住宅)

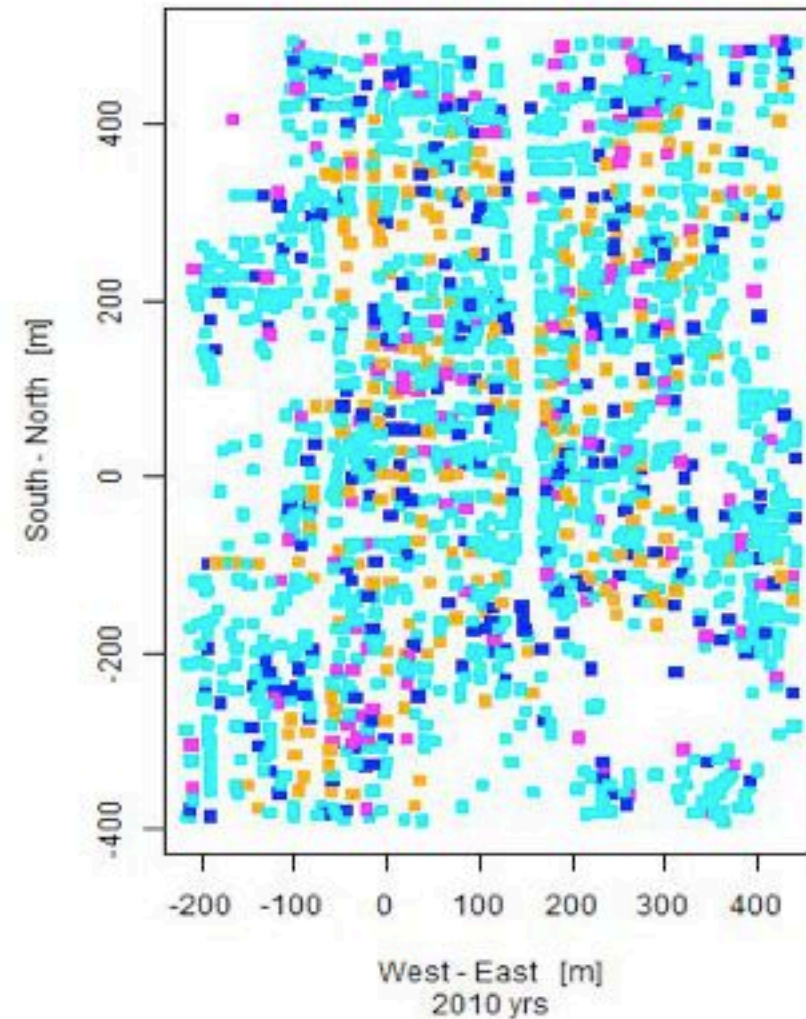


C : プレハブ住宅
(主にハウスメーカーが建てる家)

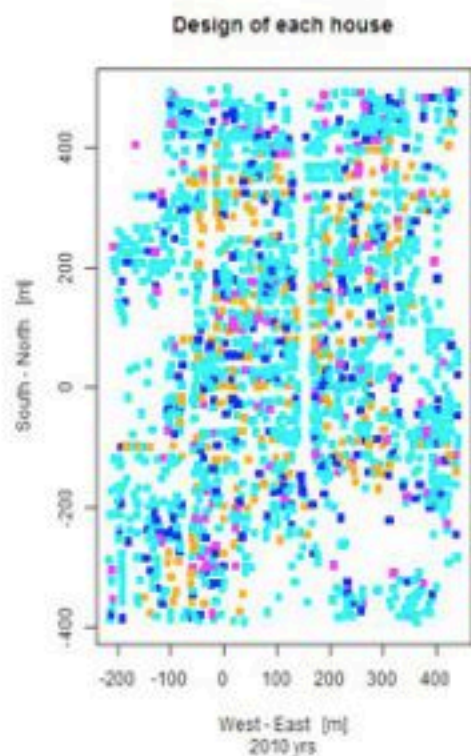


D : 個性的な外観
(個人のこだわり重視の家)

2010年の分布

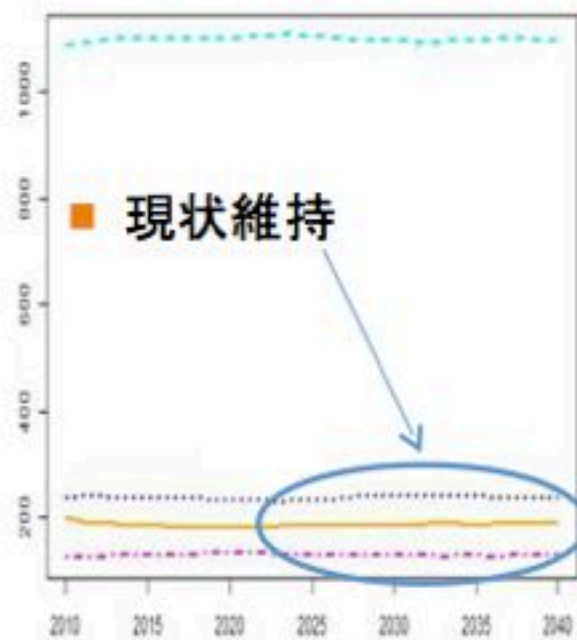
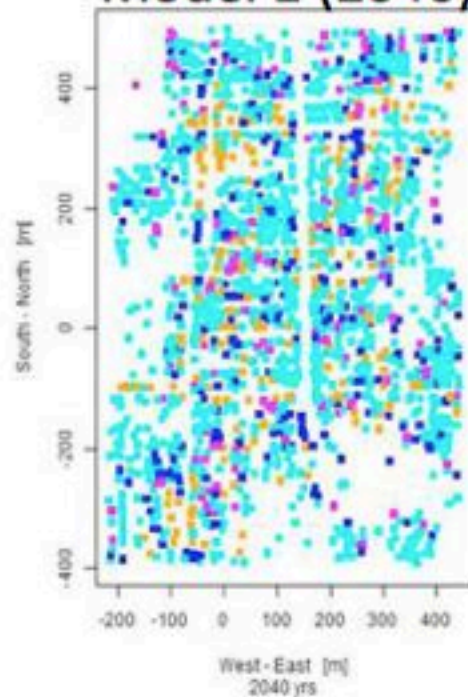


初期状態 (2010)



Model 1
自由選択

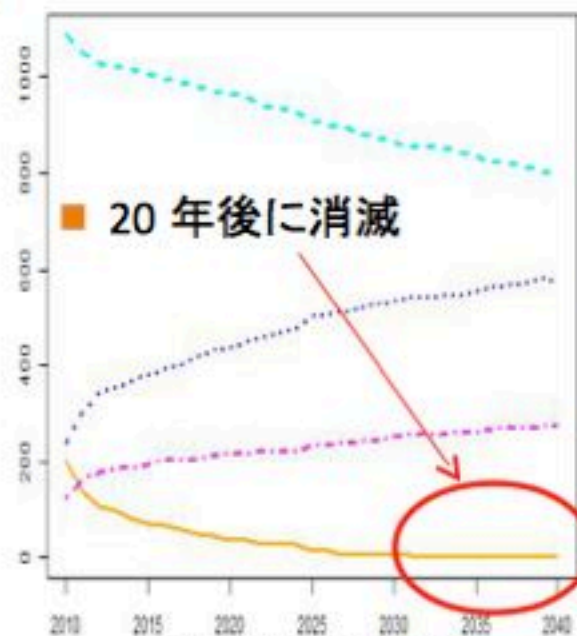
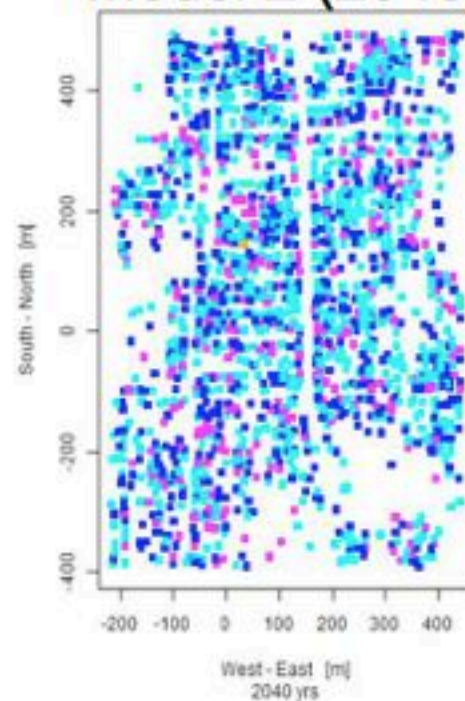
Model 1 (2040)



存在する外観種の推移

Model 2
付和雷同

Model 2 (2040)



存在する外観種の推移

Socio-Simulationics の例 2

Arkadiusz P. Wójcik (修士論文)

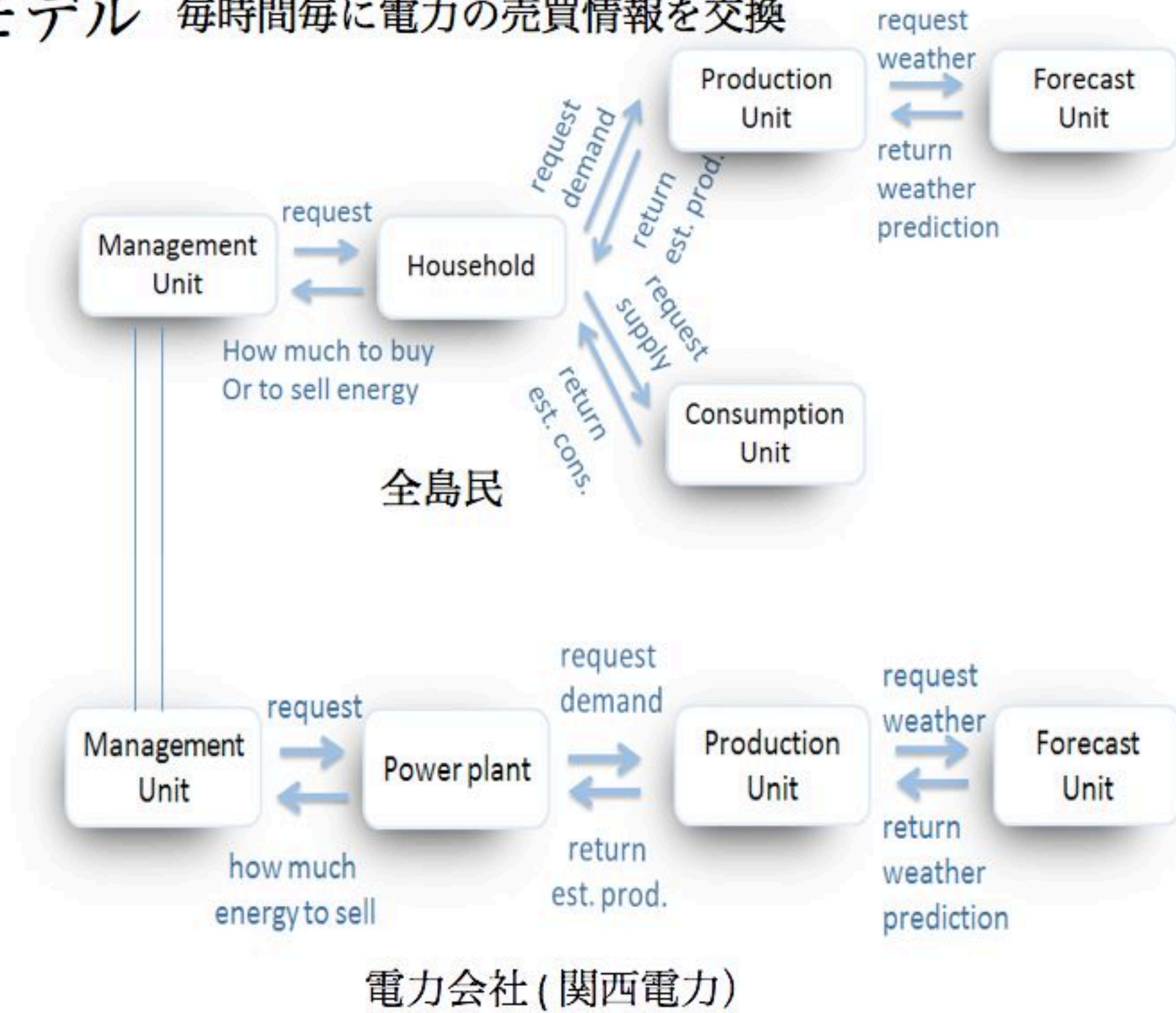
ポーランド留学生

淡路島の活性化計画

ー 全島をスマートグリッド化

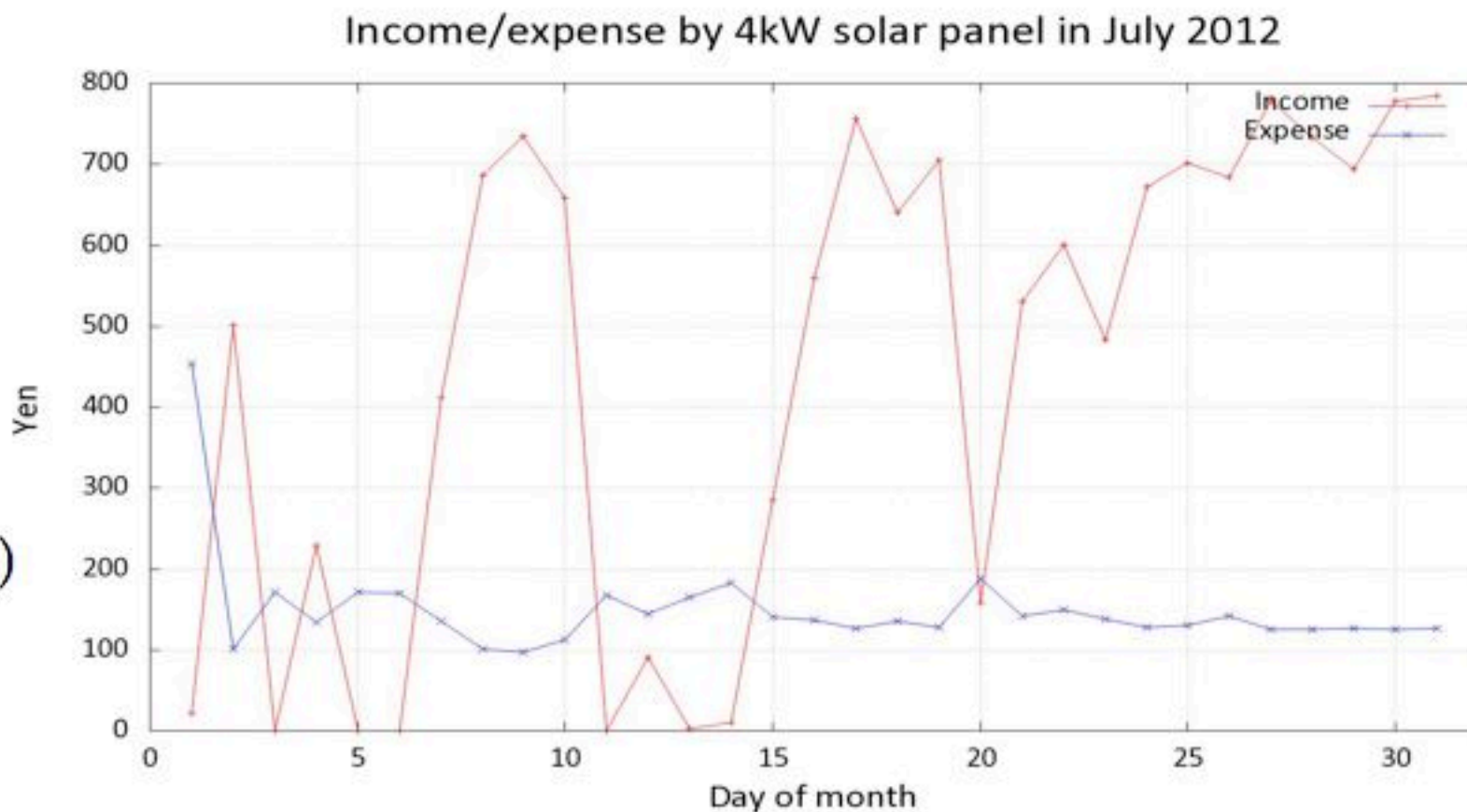
テーマ： 全島民に太陽光発電、あるいは、風力
発電設備を設置することによって島の
経済状況が改善されるか？

モデル 毎時間毎に電力の売買情報を交換

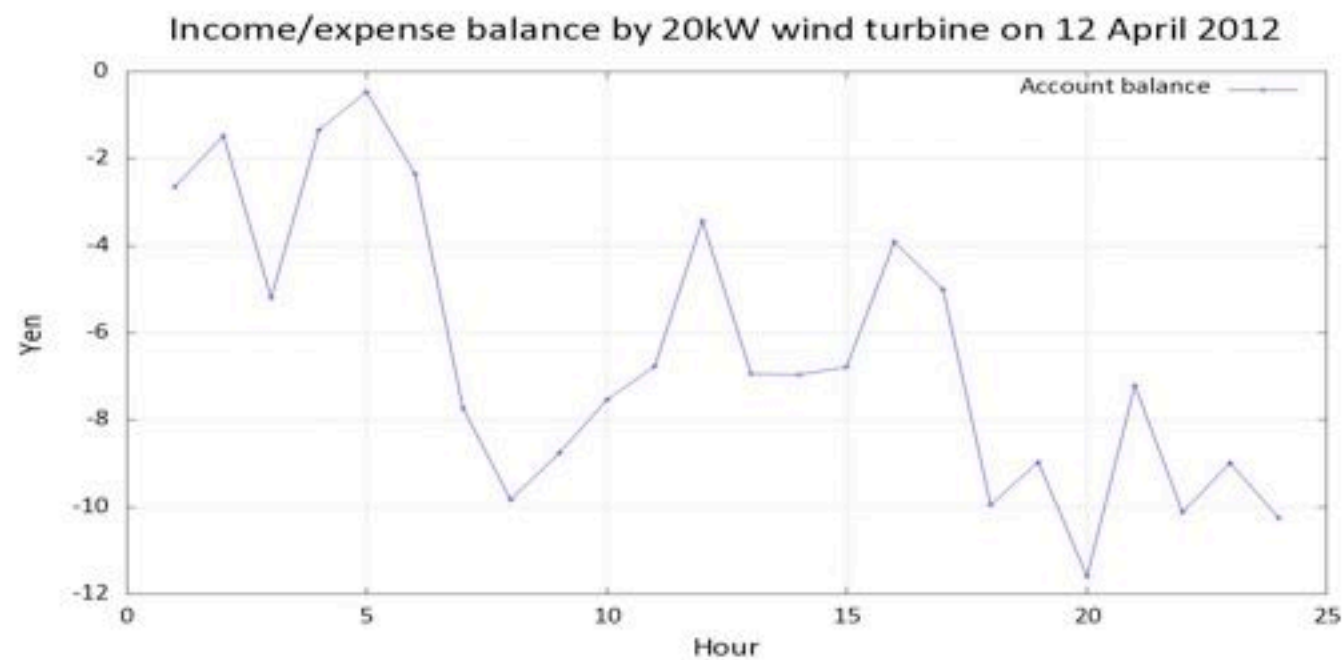


費用対効果の テスト結果

太陽光発電
(1か月)
(FIT: 42円 / kwh)



風力発電
(1日)
(FIT: 25円 / kwh)



淡路島への Wójcik 提案

各家庭が太陽光発電設備を整備することによって島民は経済的に潤うことができるであろう。

特に、農民が協力して農閑期の農地を利用してポータブル太陽光発電機を設置する

ソーラー農場の設立

を提案し、これによってより島民が経済的に潤うことがシミュレーションによって示される。

その他の修士論文研究テーマ例

- 神戸駅に通じる動線導入によるシャッター商店街元町の活性化
- 「ヒト」と山・川・海の共生による瀬戸内海の漁業保全
- 進学時スポーツ人口減少抑止による地域スポーツ振興の提案

・
・
・

まとめ

西洋文明は競争原理によって人間の論理脳、科学する能力、を極端にまで高めることに成功した。その結果、生存のための必要条件は十分に整った。しかし、そこには決定的な落とし物があった。

その落とし物とは、生存のための十分条件である地球上の全ての人類が和をもって快適に、生き甲斐をもって暮らすための感性、人間性を尊重する智慧の欠如である。